

洒落本における会話のストラテジー —山東京伝『傾城買四十八手』を資料にして—

小 川 栄 一

1. 洒落本における会話の研究

従来の日本語史研究は日本語の構造的側面について主要な課題としてきたが、現実の言語使用、すなわち言語コミュニケーションの歴史に関してはほとんど研究が行われて来なかった。過去から現代へコミュニケーションにどのような変化があったのか、それとも目立った変化はなかったのか、このような研究は手つかずの状態である。筆者は最近このような課題を目標にコミュニケーションの歴史の変遷を研究し、近代におけるコミュニケーションのあり方として、夏目漱石の小説作品の会話における論考を3編公表している¹⁾。本稿ではこれを発展させて、近世後期江戸語におけるコミュニケーションのあり方を明らかにするために、洒落本資料を用いて、遊廓における遊女と客との会話を材料にして、会話のストラテジーについて研究しようとする。

洒落本における会話を考える前提として、そもそも遊廓における客と遊女との関係はあくまでも「遊び」の範囲における疑似恋愛であることを考慮しておく必要がある。遊女は職業柄、客に対して媚びを売り、肉体を売ることはあっても、心まで開いているとは限らない。また、遊女はつねに多くの客の相手をするこ

1) 「夏目漱石作品の談話分析」(『武蔵大学人文学会雑誌』37-3 2006.1)

「夏目漱石の小説作品におけるコミュニケーションの類型」(『武蔵大学人文学会雑誌』41-2 2010.1)

「夏目漱石の文体の新しさ」(『日本語学』臨時増刊号 明治書院 2009.11)

から、客を本気で愛することは稀であったろう。しかし、客にとってみれば表面的・形式的な、通り一遍の接待ではおもしろくなかろう。遊女には真心の愛情で接してもらい、自分もその気になって遊びたいと願うのが当然であろう。そこで重要になるのが「手」である。「手」とは、遊女の歓心を買ひ、楽しく遊ぶためのさまざまな手練手管のことを言うが、その中核となるのはことばづかいである。ありていに言えば口説き文句である。客にとって「手」を駆使していかに遊女の愛情を獲得していくかが廓遊びのおもしろさにつながるのである。

吉原遊廓におけるさまざまな「手」のありようを紹介したのが山東京伝作・画『傾城買四十八手』（寛政2年〈1790〉刊。蔦屋重三郎版）である。山東京伝の生涯や作品については小池藤五郎『山東京伝の研究』（岩波書店 1935.12）に詳しいが、京伝自身も二度遊女と結婚している。『傾城買四十八手』の刊行された寛政2年（1790年）には、江戸町扇屋花扇の菊園を妻に迎え入れ、寛政5年（1793年）に菊園が病死すると、寛政12年（1800年）には弥八玉屋の玉の井（本名、百合）を二度目の妻に迎えている。京伝は容貌の美しさ、姿態の端麗さ、高い人気によって遊女たちにもかなり騒がれたといわれる²⁾。このような中で、京伝が遊廓や遊女に関する情報を得て、その経験に基づいて『傾城買四十八手』を書いたものに違いない。

『傾城買四十八手』は文学的に高く評価されている。水野稔によれば、『傾城買四十八手』は「外面の事象のうがちへの興味から脱して、遊びと恋愛の内面的観察に立ち入ろうとしている。おそらく洒落本の技法による心理描写の最も深く精緻なものが、この作品にあらわれている」と述べて、「京伝の作品中「総籬」とともに最も傑出したもの」³⁾と評価している。たしかに『傾城買四十八手』は心理描写にすぐれた作品である。しかも客と遊女の心理は会話のやりとりという形で表現されている。これは当時の会話資料としても重要である。二人がどのよう

2) 小池前掲書 P52。

3) 『黄表紙洒落本集 日本古典文学大系』「洒落本集解説」（岩波書店 1958.10）。なお、本稿の本文もこれによる。（旧漢字を新漢字に置き換えるなど、表記を一部改めた。）

な意図でことばを発しているか、会話のストラテジーを研究する上においても豊富な事例を提供してくれている。

ただし、ここで検討すべき問題が二点ある。一つは、『傾城買四十八手』における会話とは、遊廓という特殊な環境において存在するコミュニケーションの典型といえるのか、それとも京伝によるまったくの創作であろうか。水野によれば、そもそも洒落本には「遊里における通の指南、通の論議」「遊里生活案内・手引といった要素」が著しく、「うがち」の細密に徹して、「一々の場面や人物の動きをできるだけ精密に写しとろうとする写実技法とその文体」がある（注2文献「解説」）。『傾城買四十八手』は吉原の外圍だけでなく、閨房における遊女と客とのやりとりという内面を紹介した書物でもある。このことから、『傾城買四十八手』におけるコミュニケーションも基本的には遊廓におけるその典型的なあり方を紹介するもので、遊廓でよくありがちな会話が展開されているものと理解できる。

二つ目の問題として、そもそも洒落本における会話とは、通常の会話のあり方と比べてやや特殊ではないかということである。なぜなら遊女と客の間で恋愛感情の高揚を目指すという明確な目的をもった会話だからである。しかし、会話のストラテジーを研究していく上で、明確な目的性のある会話を取り上げることはむしろ有効であると考えられる。恋愛感情の高揚を目的としたストラテジーが典型的な形で発現されているからである。通常の会話においては明確な目的性をもたない社交辞令や世間話などが多く含まれ、必ずしも明瞭なストラテジーが発現されるとは限らない。洒落本における客と遊女の会話を取り上げる理由は、明確な形で表れたストラテジーを捉えることができるからである。洒落本における会話の特殊性を分析することは、当時一般のコミュニケーションの性格を明らかにする基盤となるものである。

なお、書名には「四十八」とある。「四十八」とは、相撲の四十八手など、一般的にはその種のを網羅する場合に用いられる。『傾城買四十八手』の「四十八手」も本来はあらゆる手を示すものであろうが、実際には五つの「手」が取り上げられているのみである。しかも、「そはそはする手」については、草

稿は出来上がっているが、叙述が複雑で、丁数が多くなるという理由から本文が省略されている⁴⁾。本文があるのは他の四つのみで、それぞれが一つのストーリーとして、独立した章段を形成している。

しっぽりとした手

やすい手

見ぬかれた手

(そはそはする手)

しん(真)の手

京伝によれば、「四十八手」とは新しい「手」を尽くしたものという意味である。

されば傾城をころすも、手にあらずして何ぞや。故に今^{なん}新^{かるがゆへ}手^{しんて}を^{つくし}尽^{その}して、其^な題^なを四十八手とよぶ。(「四十八手叙」)

『傾城買四十八手』ではどのようなものが「手」であるのかを明示されているわけではない。本文中の「手」の例を見ても、その内容は具体的ではない。

ムスコ わつちや何ンといつてよいものか、しりやせん。

女郎 うそをおつきなんし。ぬしやアいつそ手^うがあらつしやるヨ。

(しっぽりとした手)

くらの戸 この間も居つづけしたよ。手^うができたろう。

里風 おまえの顔に手ができたら、化け物屋敷の行灯だ。

(やすい手)

ところが、『傾城買四十八手』を読み、分析を加えていくと、客と遊女の愛情の発展に何らかの効果をもたらした会話なり行動なりが必ず出てくる。作品の中でこれは「手」であると明示はされないものの、これが「手」にあたるものと見なすことができる。「手」の分析を通じて、会話のストラテジーを明らかにしていこう。

4) 京伝は後に「そはそはする手」の腹案をもとに『青楼昼之世界錦之裏』(寛政3年)を書いている。

2. 「しっぽりとした手」における会話のストラテジー

『傾城買四十八手』は「しっぽりとした手」から始まる。「しっぽりとした手」という名称にふさわしく、愛情こまやかなやりとりが描かれている。その概要を紹介しよう。

客：ムスコ。十八歳くらい。日本橋西河岸に住む。

遊女：突き出し間のない昼三。十六歳。

ムスコは日本橋西河岸に住むという設定であるが、廓遊びには慣れていない、ウブの青年である。遊女もこの春からの「突き出し」⁵⁾で、美人で人柄がよいが、経験が少ないために客扱いに不慣れで、馴染みの客もいない。この二人は初体面で、しかもともに年若く経験が少ないので、なかなか会話のきっかけがつかめない。ムスコは無口で黙りがち、遊女も恥ずかしそうにしている。ようやく遊女のリードで会話が始まる。まず、遊女が「うそ」追及のストラテジーを使ってムスコの本音を引きだそうとするが、ムスコは「はぐらかし」のストラテジーと「しゃれ」を使って、これをおかわそうとする。むしろ遊女がじらされてしまう。(下線筆者。—以下は原本では割り書きになっている。)

女郎　ぬしやアいつそ気がつまりんすヨ。

ムスコ　なぜへ。

女郎　だまつておいでなんすからサ。

ムスコ　わつちや何ンといつてよいものか、しりやせん。

女郎　うそをおつきなんし。ぬしやアいつそ手があらつしやるヨ。

ムスコ　手とやらは二本ほきやござりやせん。

女郎　にくらしいの。一つつめりそふにしたが、ゑんりよして、つめらず。

ここで「うそ」に着目する。遊女は、ムスコの言った「何と言ったらよいか知らない」という発言について、「うそ」だと指摘する。ムスコとしては「うそ」を言ったつもりはなからう。半ば正直に述べたところであろうが、若干の謙遜が

5) 「突き出し」とは、初めて客をとる遊女のこと。

混じっている。その謙遜の部分を遊女は「うそ」だと言うことによって、ムスコを少しおだてて、本音を引きだそうとする。

「うそ」とはそもそも不誠実の証になるので、「うそ」をついていると言われた人間は困惑するのが常であろう。一般的には「うそ」の追及はFTA⁶増大のストラテジーである。しかし、この場合の遊女の「うそ」追及はムスコの謙遜による発言に対するものであり、謙遜の否定によってかえってFTA軽減につながる。まだかけ出しの遊女ではあるが、ムスコの謙遜を見ぬいて、それを上手に切り返すのは手慣れた印象がある。ところが、ムスコの方も「手とやらは二本ほきやござりやせん」と「しゃれ」で返す。遊女の指摘を「しゃれ」にしてしまうところなど、ムスコもうぶであってもコミュニケーションの巧者であることがわかる。

続いて、遊女と、禿や同僚の遊女（朋輩女郎）とのやりとりがあって、ようやくムスコと二人きりの状態になる。遊女は会話のきっかけとしてムスコの住所を聞き出そうとするが、ムスコは知られまいとして、今度は意図的な「うそ」をつき、はぐらかす。

女郎 モシへぬしの内は、花菊さんの客人の近所かへ。

ムスコ イ、へちがひやす。

女郎 どこざんすへ。

ムスコ 神田の八丁堀サ。

女郎 うそをおつきなんし。よくはぐらかしなんすヨ。

ムスコは本当には「日本橋西河岸」に住んでいる。西河岸は檜木問屋、廻船問

6) ポライトネス理論の用語で、フェイス侵害行為 (face-threatening act) [FTA]、すなわち、人のフェイス (体面) を脅かすような行為のこと。

Brown, P. & S. C. Levinson. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. 1987.

Goffman, E. *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York. 1967.
(日本語訳) 広瀬英彦・安江孝司 訳『儀礼としての相互行為 — 対面行動の社会学』(法政大学出版局 1986)

宇佐美まゆみ「談話のポライトネス — ポライトネスの談話理論構想」(国立国語研究所編『談話のポライトネス』2001)

滝浦真人『日本の敬語論 ポライトネス理論からの再検討』(大修館書店 2005. 6)

屋が多かった土地で、このことからムスコが裕福な商家の出身であることが暗示されている。ムスコがとっさに言った「神田の八丁堀」とは、神田今川橋の西方の神田堀とその付近の本銀町辺の古称で、その当時はすでに用いられていない地名であって、架空人物の地名として用いられることが多かったという⁷⁾。要するに、ムスコが「神田の八丁堀」というのは、自分の出身をわざと偽って謙遜するための「うそ」であった。もちろん悪意あつての「うそ」ではなくて、遊女に無用な緊張を与えないための方策と見うけられる。しかし、このような些細な「うそ」をも見逃さないのが遊女の姿勢であつて、さらに追及を重ねる。ムスコもさらにはぐらかそうとする。

ムスコ 跡でしれやす。

女郎 なぜへ。気にかゝりんす。いつておきかせなんしな。おいひなんせんと、くすぐりんすよ。

ムスコ いはずともいゝじやアねへかね。マアとをひのさ。

女郎 ほんにかへ。

遊女はムスコを「くすぐる」ことで本当のことを言わせようとする。「くすぐる」ことは「つねる」ことと同様、遊女の愛情表現でもある。しかし、遊女の質問攻めに閉口したムスコは、逆に遊女にあててみるように言って、質問を受けるストレスから脱して、立場を逆転させる。

ムスコ おめへあててみな。

女郎 そんなら、かしら字をいつておきかせなんし。

ムスコ かしら字は「に」のじさ。

女郎 まちなんしよ。「に」のじだね。コウトそんなら日本橋かへ。

ムスコ ーわらひながら、

ムスコ ちがつたね。

遊女は質問のヒントとして頭字^{かしらじ}を尋ねる。質問に答えやすくするための方策であるが、これによって二人の親密度が高まってくるようである。

7) 『黄表紙洒落本集 日本古典文学大系』の頭注による。

女郎 一又しばらくかんがへて、

女郎 そんなら、にかは丁とやらかへ。

ムスコ いんへ。

女郎 じれつてへ、どこだのう。一トかんざしで、まへがみをかく。

ムスコ やつぱりほんとうは、日本橋の近所西河岸サ。

女郎 ソレ見なんし。よくあてんしたらう。

やりとりの結果、住所が判明する。ムスコとしては自分の地位の高さを知られてしまったことになるが、遊女はそのことにあまり反応していない。それというのも、遊女は遊廓の世界からほとんど外出せず、外の世界に疎いことが以下の質問で分かる。

女郎 モシへ日本橋へもかんのんさんを通つていきんすかへ。

ムスコ しれたことサ。

遊女は日本橋西河岸が実際にどういう所か詳しくは知らないようである。そこで住所に関する話題を切り上げて、ムスコに妻がいるか質問をする。これは自分に対して本当に愛情があるのか確認するためのストラテジーと見なされる。

女郎 大かた内には、おかみさんがごぞんせうね。

ムスコ ナアニまだそんなものがあるものだ。

女郎 そんなら、どこぞの女郎しゆに、おたのしみがあんなすだらうね。

ムスコ 内がやかましくて出られぬから、こつちのほうなぞへは、きた事はねへのサ。きよねんりのまちのかへりに、つれがあつて、外へ一度いきやした。

ムスコは自分が未婚で、吉原には一度来たことがあると正直に告白する。ここでうそをつかず正直なのは遊女の嫉妬心を抑えるためのストラテジーと考える。このように、遊女はムスコを質問攻めにしているが、ムスコにとってはプライベートのことをしつこく聞かれるので、やや迷惑気味である。そこで、ムスコは一転して遊女に質問を始める。

ムスコ わつちが事ばかしいはずとも、おめへのいろをちつと咄してきかせナ。

女郎 どふしてそんな事がござんすものか。わつちや去年までみのわの寮にゐんして、此春からでんしたヨ。いろをしたくつても、わつちらがやうなものは、だれもしてくれんせんものを。

ムスコ よくうそをつくの。うそつきとつけやせう。

女郎 ほんざんすよ。

遊女が用いた「うそ」追及ストラテジーを使って責め立てておいて、いよいよ本筋へ入る。

ムスコ そんなら客にほれたのがあるだらう。

女郎 人にほれるのはきらひサ。

ムスコ そんならわつちらには、なをだらうね。

女郎 ぬしにかへ。一トかほをみてわらひ、

女郎 跡は申すめへ。一トふとんのすみへつけしくゝりざるを、ひねくつてゐる。

ムスコ じらしなさるね。

ここで遊女が思い切って告白する。

女郎 モシへわつちやたつた一ツ、ねがひがござんすよ。

ムスコ どふ云ねがひだ。

女郎 わつちがほれた客しゆの來(き)なんすやうにさ。

ムスコ おめへ今、ほれたものはねへといつたじやねへか。

女郎 たつたひとりござんすよ。

ムスコ うら山しい事だの。どこの人だへ

女郎 一だまつてゐる。

ムスコ コウどこの人だへ。

女郎 おまへさ。一トおもひきつていふ。

「ほれた客」とはムスコのことであるが、遊女はそれを第三者的に述べて、最後にそれがムスコであることを告白している。この中間に沈黙をはさんでいるのだが、これがやや恥ずかしそうな感じで、愛らしく感じられる。そう言われたムスコはうれしくなるが、はやる心をおさえて対応する。これに続いて、ムスコが

再び来てくれるように「うそ」追及のストラテジーで確約させる。

ムスコ でへぶあやなしなさるもんだの。一トむねどきへ。

女郎 ほんでござんすよ。それだけれど、わたしらがやうなものだから、もうこれぎりでお出なんすめへね。

ムスコ もつてへねへ。おめへのやうなうつくしひ女郎しゆだものを。

女郎 あいさ。左様サ。たんとおなぶんなんし。

ムスコ ほんにサ。

ムスコのいう「あやなす」、遊女のいう「なぶる」も、相手の発言を信用していないことを前提にする言い方で、「うそ」追及のストラテジーの一環である。

まだ冷静でいる遊女に対して、ムスコはとうとう再来の意思を告げる。

ムスコ 呼んでさへくんなさるなら、くる気さ。

女郎 うそや。

ムスコ きたらどふしなさる。

女郎 じつかへ。

ムスコ しれた事サ。

女郎 マアうそにもうれしうざんす。

この遊女はかけ出しではあるが、一途に愛を告白することと、「うそ」追及のストラテジーによって、ムスコの愛を告白させることに成功したのである。それでも遊女は信用しない。この段になっても遊女は相当に用心深い。ムスコは「うそ」追及のストラテジーを使って、最後の攻勢に出る。

ムスコ それがうそだ。

女郎 ほんの事サ。

ムスコ どれ、ほんかうそか。一トだきついてわりこむ。

女郎 エ、モつめたいが堪忍しなんしへ。一ト足でめつける。

以上、「しっぽりとした手」におけるムスコと遊女の会話の主要部分について分析した。

3. 「はぐらかし」のストラテジーと「うそ」追及のストラテジー

「しっぽりとした手」の会話に表れたストラテジーとして特に着目されるのは、これまでも触れてきた以下の二つである。

(1) 「はぐらかし」のストラテジー (=相手の発言をはぐらかすストラテジー)

(2) 「うそ」追及のストラテジー (=相手の発言を信用しないストラテジー)

これらはともに正常な会話を成立させないためのストラテジーということができる。まず、「はぐらかし」のストラテジーは、ムスコが会話の最初にとっていた基本的なストラテジーである。遊女の誘いかけ、問いかけに対してまっとうな対応をしないで、はぐらかす。ムスコのこの態度のせいで二人の会話はスムーズに展開しない。

会話の趣旨をまとめてみる。

遊女 : ムスコが黙っていて気が詰まるので、何か話してくれ。

ムスコ : 何と言ったらよいかわからない。

遊女 : 遊女を口説く「手」を知っているだろう。

ムスコ : 「手」は二本しかないと「はぐらかし」。

遊女 : ムスコにタバコをすすめる。

ムスコ : 「タバコは吸わない」と答える。

遊女 : ムスコの住所を尋ねる。

ムスコ : 最初は答えず、遊女が問い詰めると、「神田八丁堀」という「うそ」を答える。

このように、ムスコには遊女のもちかけた話題の展開を遮る発言なり行動なりをとっている。ムスコは「はぐらかし」によって、あえて会話の発展をさせない。遊女としても会話の進めようがないので、別の話題に変えていかざるをえない。ムスコはあえてそれにも応じず、次々とはぐらかしていく。ムスコが遊廓における経験が少ないために、遊女の質問に対して気の利いたことがいえないことはあるにしても、ここまで続くと、わざと会話を成立させていないかのようである。

実は、遊女も朋輩の遊女に対しては同じストラテジーではぐらかそうとするが、

これは一種の照れ隠しである。

朋輩女郎 おたのしみさんすね。

女郎 一きこへたれど、わざと、

女郎 なんざんすとへ。ちつともきこへんせん。一トぢらし、につこりとわらふ。

そもそも会話においては参加者が互いに協調することが基本原理になっている。ポール・グライスが「言葉のやり取りはふつう、少なくともある程度までは、協調的な企てである」、「会話の中で発言するときには、当を得た発言を行うようにすべきである」と述べるとおり、会話には一般に「協調の原理」(Cooperative Principle)が存在する⁸⁾。しかし、ムスコの場合は、遊女の発言に対して「はぐらかし」という非協力的な態度をとっている。これはグライスのいう、会話における「協調の原理」に違反する行為である。しかし、これがムスコの戦略である。このムスコは元来無口で、遊廓での体験も少ないのだが、「はぐらかし」を使って遊女を感情的に責め立てている。もちろん会話の展開ができない遊女はじらされてしまう。それまでやや緊張気味であったが、「じれたい」「にくらしい」など感情を表さざるをえなくなる。感情が出る結果、遊女は次第にムスコに打ち解けてくる。「はぐらかし」の戦略が効果を上げたものといえる。初対面で、緊張から話題の進展しない状況において、「はぐらかし」は有効な戦略だったことがわかる。

次に、「うそ」追及の戦略とは、相手の発言内容をすなおに信用しないことによって、相手の不誠実を責めるとともに、相手の真意なり本心なりを引きだそうとするものである。遊女と客の間で「うそ」をつくことは相手を裏切る行為であって、互いに「うそ」をつかず誠実を尽くすことが愛情の証であったろう。このことから追及される側は「うそ」をすなおに認めるわけではないので、そこで対立が生じてしまう。会話の協調が損なわれるので、「はぐらかし」と同

8) ポール・グライス著/清塚邦彦訳『論理と会話』(勁草書房1998。原題: *Studies in the Way of Words*: Harvard UP, 1989)。「協調の原理」を基本にして、量、質、関係、様態のカテゴリーに関する下位格率がある。

様にスムーズな会話を妨げるストラテジーといえる。「うそ」追及のストラテジーは最初に遊女が用いたものであるが、ムスコはこれを逆手にとって遊女に対して「うそ」を追及する。遊女もまた「うそ」追及で応酬する。

「うそ」の追及について、誰が何に対してという観点で整理すると、下記のとおりである。

遊女：ムスコが何を話したらよいか分からないと言ったこと

遊女：ムスコが神田八丁堀に住むと言ったこと

ムスコ：遊女が馴染みの客はいないと言ったこと

遊女：ムスコがまた来てもよいと言ったこと

ムスコ：遊女がうれしいと言ったこと

「うそ」追及のストラテジーにも2種類あることがわかる。一つは明らかな「うそ」を指摘するものである。遊女の行った「うそ」追及がこれにあたる。ムスコが軽い気持ちでついた明らかな「うそ」（神田八丁堀に住んでいる）を即時に見破るもので、直感鋭く正鵠を得た追及である。しかし、遊女はムスコの「うそ」を徹底的に追及しようとはしない。まだ客に対して気兼ねがあるからであろう。もう一つは相手が正しいこと、本心から言ったことについて、あえて「うそ」と追及するものである。これは遊女が馴染みの客はいないと言ったことに対して、ムスコが行ったものである。おそらく遊女としては「うそ」を言ったつもりはないのである。それをなぜ「うそ」と言うかといえば、ムスコは、遊女の発言にある社交的な部分（お世辞、過度の謙遜）を鋭く見ぬいたからである。しかし、それを言った遊女に悪意を込めたつもりはない。ムスコを喜ばそうとしてつい出たものであろう。しかし、ムスコはそのような些細な社交辞令にも容赦をしない。このムスコはやや潔癖症なところがあり、そのような遊女の態度が許せないであろう。あるいは、ムスコはまだ遊廓での体験が少なく、ことばの遊びに慣れていないのかもしれない。しかし、ムスコは遊女に甘えるように、控えめな言い方で追及するので、二人の対立にはつながらない。

このように、「うそ」の追及はことの真偽を明らかにしようとするだけでなく、相手の本心を引き出すストラテジーでもある。遊廓において遊女は客に必ずしも

本心で接しているわけではない。むしろ本気で客と恋愛関係になってしまったら（後で論ずる「真の手」の場合）、遊女としての務めが成り立たなくなってしまう。そのためについ社交辞令や、相手を喜ばす「うそ」を言うことが多くなるのであろう。そこで一度「うそ」と追及されると、追及される側は「うそ」とつけなくなるのであって、心理的に追いつめられて、つい本心を言わざるをえなくなる。ムスコは一貫して「うそ」か「ほん」（＝本当）かで遊女を責め立てて、ついに遊女の愛情を確めたのである。

「しっぽりとした手」で現れるのは、「はぐらかし」のストラテジー、「うそ」追及のストラテジーなど、スムーズな会話になりにくいものである。次の「やすい手」のように通の客と年増の遊女との間における丁々発止とした会話は展開しない。しかし、『傾城買四十八手』にある四つの「手」のうちで、会話は滞りがちであっても「しっぽりとした手」が最も好ましく思われる。

4. 「やすい手」における「しゃれ」のストラテジー

次は「やすい手」について考察しよう。

なじみの客（里風）：山の手に住む武士。通。二十二三歳。

遊女（くらの戸）：小見世の座敷持ち。よほど年増で、病身と見えて顔色が青く、やせがた。

里風は年増の遊女（くらの戸）に親しんでいるが、始終悪態をつくので嫌われている。くらの戸は里風の悪態にひたすら耐えている。会話本文をそのまま引用すると長くなるので、会話の要点を示すのみとする。

里風　　：くらの戸が持ってきた懐石料理（温石）をシャレて、「餅」（温石と形が似ている）かと思ったという。

くらの戸：里風のシャレを「手に負えないげびぞう」と擲揄する。

里風　　：かつて経費削減のため炭の小買いをしていたことを擲揄する。

くらの戸：外聞が悪いと一蹴。

里風　　：酒を飲みたいという。

くらの戸：(贅沢な)酒ではなくて(安価な)茶漬けにすればよいという。

里風　　：料理の鮮度が古いこと、代用品を使っていることなどを批判して、料理番の悪口をいう。

くらの戸：里風に批判の多いことを揶揄。

里風　　：くらの戸が出してきた五分漬けを賞めて、「五分づけはだな血の涙が出る」と俗謡をもじったシャレをいう。

里風は「通」であって、店の経営事情や料理の内容にも精通しているので、以上のような相当に辛口の批評をいう。しかし、気に入った料理が出ると、機嫌をよくしてシャレをいう。このようなことから、くらの戸は、いつもながら口うるさい客と思っている。批判されると当然くらの戸も面白くないので強く反発し、里風に悪口を言って喧嘩腰になるが、実はこれが里風の「手」なのである。

このような会話は、FTAを増大するものであり、もちろんグライスの「協調の原理」に反する。里風はあえてこのような会話をすることによって、くらの戸の愛情を引きつけようとしている。この二人の関係を考えてみると、里風は二十二三歳と若い武士でありながら、くらの戸はよほどの年増で、しかも病がちである。客の禄高はあまり高くないようで、借金のカタに八丈の着物を入れているなど、経済的には苦しそうである。里風の本心としてはもっと若くて美しい遊女を希望しているのかもしれない。年増のくらの戸が若い遊女「いろ糸」のことで里風をあてこするの、里風の本心を見ぬいているからであろう。しかし、金銭の都合上、小見世で年増の遊女を買わざるをえない。その不満があつて年増のくらの戸に八つ当たりしているようにも思える。しかし、若い遊女に気があることについては否定する。年増の遊女を口説くにしても、浮気心なく一筋であることが最低条件なのであろう。

ところで、このくらの戸の物言いはあまり遊女らしくない。「なんす」などいくらか遊女語を使つてはいるが、全体としてやや乱暴な言い回しが多く、自分を「おら」、相手を「おめえ」「てめえ」など、下町のことばづかいである。遊女らしく洗練されたところは少しもないが、気立てはよい。むしろ里風が「ごぜえす」や「わっち」など遊女語を用いる場面がある。

いろ糸　　こんヤア又、おめへがたのむつごとをきく役だね。つれへこつたの。

里風　　むつごとどこじヤアごぜへせん。わつちが一こといふと、十ことでけへしやす。

くらの戸　こいつアおかしい。手めへのことを云やつさ。いゝ業さらしだ。

続いて、里風は、くらの戸がたばこ盆の引出しにしまっておいた帳簿の中から、他の客（隠居）を見つけ、これをネタにしてくらの戸をさらに追及する。里風は、この客が遊女に小遣いをくれるなど気前が良いと聞いて、嫉妬心が起きてきたようである。二人の関係が微妙に変化する。（以下、要点）

里風　　：「いんきょさん」とは誰のことか。気がもめる。

くらの戸：誰でもよい。

里風　　：色の黒い白魚の幽霊のようなおやじか。

くらの戸：それでも茶屋づきで来た客だ。

里風　　：廓の外にある低級な茶屋だろう。

くらの戸：この間も居つづけしたよ。手ができたらう。

里風　　：おまえの顔に手ができたら、化け物屋敷の行灯だ。

くらの戸：どうとでも言え。諸事苦界だから。

里風　　：なんだ、「すがい」（酔貝）だ。

くらの戸：その客は小遣いまで気をつけてくれる。

里風　　：その小遣いを借りたい。

くらの戸：勝手にしろ。

その後、人に頼まれた新造が金を借りに来たり、隣座敷の遊女「いろ糸」が冷やかに来たりする。いろ糸は同じく座敷持ちで、細面で色白、器量はよいが、底意地が悪い。くらの戸はいろ糸をネタにして里風をからかう。（以下、要点）

くらの戸：いろ糸が里風に惚れているとき。

里風　　：そんなはずはない。

くらの戸：おまえもいろ糸に惚れているだろう。

里風　　：惚れたの惚れないのと、どうでもよい。

くらの戸：里風がいろ糸への仲介を糸菊に頼んだのはあつかましい。いろ糸が小間物屋の助と色事をしたのはおもしろかった。

里風：自分のことは棚に上げて。

くらの戸：私は他の遊女の客をとったことはない。

里風：巢鴨の吉と色事をしただろう。

くらの戸：義理でしたもので、それも若い時のことだ。

里風：その例は他にいくらでもあるだろう。若い時からそうだとすると思いやられる。

くらの戸：もう知らない。

このように二人は互いに相手の浮気心を追及し、ともに貞淑でないことを批判しあっている。その反面、現時点において互いに一途な愛情を持っていることを確認しているともいえる。これで相思相愛を確認し、和合の条件が整うのである。しまいにくらの戸が根負けしてしまい、うるさい里風を黙らせるために、会話を打ち切って、くらの戸から先に寝てしまう。

里風が遊女や店への批判を繰り返したのは、なんとかくらの戸を自分のものにして、くらの戸との相思相愛を確認するためであったと考える。これが里風の「手」である。里風は威張り散らしてはいるが、禄高が低く、経済力がない弱みをかかえている。くらの戸が金回りの良い隠居を客にしているのも内心穏やかではない。しかも、夜が明けると里風があたふたと帰って行くのも滑稽である。京伝の「評」によれば、悪態についてはいるが、たわいのない客とされている。

ところで、この里風は「しゃれ」を使うことが実に多く、計17箇所を数える。その「しゃれ」はほとんどイヤミには違いないが、単なる語呂合わせでもなく、多岐にわたる風流な言い方を多数含んでいる。里風の「しゃれ」は粹の趣向に基づいたセンスの高いものと理解される。

(1) ことばからの連想

○懐石料理を温石からの連想で、「餅かとおもった」。

○遊女が「似たり寄ったり」と言ったのをうけて、「ちよき（猪牙）にふたり（二人）がきいてあきれ」る。

○いろ糸が言った「むつごと」（睦言）を「六つごと」と置き換えて。

「むつごとどこじやアごぜへせん。わつちが一こといふと、十ことでけへしやす」

○くらの戸から、里風はいろ糸に惚れているだろうと冷やかされて。

「なんのほれたのほれねへのと、土葬の施主が卵塔場で小言をいやアしめへし。

(2) 決まり文句からの連想

○五分漬けが気に入って、「五分づけはだな血の涙が出る」。

○「そふはとらの（そうは取らぬ）門のこんびらだ」。

○「いやならこっちも、いやだのすし（小鱈の寿司）だ」。

○「気がもめ（駒込）の吉じやう寺だはへ」。

(3) 人・物の顔や形を何かに見立てるもの

○隠居の客のことを、「色の黒ひ白魚のゆうれい、駿河細工の木地呂色といふつらのおやちか」。

○遊女に対して、「手めへもその兒で手ができちやア、化物やしきのあんどんといふものだ」。

○火鉢の火が強くなったのを、「駄菓子やの七輪を見るやうだ」。

○いろ糸の肌のきめが悪いのを見て、「あの子のくびも、かつのこを白湯でに（煮）たといふくびだ」。

○くらの戸の顔を見て、「呑糸、もしねへ酒をくらつて、ひてへをみや、江戸絵図の川といふすぢ（*青筋のこと—筆者注）をだしてさはぐやつさ」。

○くらの戸が先に寝たので、「願をきかねへてるてる坊主を見るやうに、よくねてばつかり居るぜ」。

(4) あてこすり

○年増のくらの戸でも隠居の客に泣いてみせれば、客は感激して「しぬはずの池（不忍池）だ」。

○火鉢の火が強くなったので、「炭を俵でかつたと思つておごるぜ」。

○くらの戸が他の客と色事をしたことについて、「惣ざいの芋をくつて、お

ならばかりしていた時分からそれだから」

里風に負けずに、隣座敷の遊女「いろ糸」も「しゃれ」を言う。

○歌（越後節の俗謡か—筆者注）の文句から、「きついあはせ鏡とは思へども、だまされて咲（く）室の梅さ」。

ところで、「しゃれ」とは一般に、見立てのおもしろさ、語呂合わせの意外性などによって周囲の笑いや感動が起きて、雰囲気緩和が多いであろう。基本的にはFTA 軽減の効果がある。しかし、里風の「しゃれ」は遊女や他の人物を批判したりあてこすったりするものであり、一見、FTA 増大の目的で使われているようでもあるが、必ずしもそうとはいえない。

けんかの場面で使われる「しゃれ」として、『浮世風呂』の例がある。

△いさみ「つきとばしてなんだ、此ごつぼう人め。四文一合、湯豆腐一盃がせき
の山で、に、に、濁酒の粕食め。とんだ奴じやアねへかい。誰だと思つてたはことをつきやアがる。二日の初湯ツから大卅日の夜半まで、是計もいざア云た事のねへ東子だ。ナア、斯う云ちやアしちもくれん
だけれど

△とりさゆる人「ハテサ、まあ能はな

△いさみ「インニヤサ、おめへまでがおつかじめる事アねへはな。此方は大体な事アリやうけんして、ちんころがうんこを、踏だやうな面で通さアな。無面目も程があらア。何處の釣瓶へ引かゝつた野郎か、水心もしらねへ
泡ア吹ア。コレヤイ、六十六部に立山の話を聞アしめへし、あたまつか
らおどかしをくふもんかへ。石菖鉢の目高なら、支躰相應な牙をおつかけてりやアまだしもだに、鯨や鯨を吞うとは、大それた芥子之助だ
ア。掘抜の足代へ、家鴨が登らうといふさまで、おれに取てかゝつたのが胸屎だ。（前編・下）

そもそも江戸っ子は短気で、けんか早いといわれる。けんかは当然ながらFTA 増大につながる。そのような中でいくぶんかでもFTA を軽減するストラテジーが「しゃれ」の使用ではないかと考える。上記の下線部分において「しゃれ」があるのだが、かなり高度な内容を含むものである。けんかの場面でなけれ

ば思わず吹き出してしまいそうな「しゃれ」である。この「やすい手」の客（里風）にとっても、遊女や店のことをさんざん批判して、悪口（というよりも憎まれ口というべきか）を言うのであるが、これを続けていたならば遊女と完全に不仲になってしまう。にもかかわらず里風がそうならないで済むのは、「しゃれ」を連発することによって、遊女がどうしても憎めないからであろう。経済的にも裕福ではなくて、しかたなく年増の遊女（くらの戸）をあてがわれている里風であるが、自身はまだ若いにもかかわらず、年の差を乗り越えてくらの戸を手玉にとるのはなかなかの手練れというべきであろう。

5. 「見ぬかれた手」におけるモンスター客を鎮めるストラテジー

続いて「見ぬかれた手」におけるストラテジーを考察する。

客（源吾）：二十二三歳。でぶでぶと太った武士。

遊女（山）：二十歳くらい。細面で、目鼻立ちがよく、売れっ子。

この日は名代の客があり、遊女「山」はそちらを相手にしているので、源吾は遊女を独占することができない。源吾は後回しにされたために、遊女がなかなか来ないのである。幫間が立ち寄って、しばらく話相手になってくれるが、源吾がチップを出さないので、幫間もすぐに帰ってしまう。源吾は退屈して、じっと待っているうちに一寝入りして、ふと目が覚めると、隣に新造が寝ているが、それでもまだ遊女は来ていない。新造も寝ぼけて他の客の名を呼ぶ。ここで源吾はにわかに怒り出す。夜更けにもかかわらず、今すぐ帰ろうとする。これを見た新造はあわてて遊女を呼びに行く。名代の相手をしていた遊女がかけつけて来ると、源吾はかんかんになって怒っている。しかし、遊女から見ると、怒りはすぐおさまると見切っているので、源吾を見下したようにふるまう。

女郎 ぬしはマアなんだへ、今じぶん。

源吾 やかましい。おどれがしつた事じやない。ふとひ女郎めだ。いひぶんがあるが、よふいはぬ。うぬがやうなくさつた女郎には、いふくちもたぬ。アアわかひものに、はきものをおろさせろ。ちや屋のくるをま

つてはゐぬ。かへる。とむるな。

源吾が怒っていても、遊女は落ち着いていて、いま帰るのは用心が悪いという理由で帰ることを引き留める。

女郎 それだつても、用心がわるふござんす。きつい腹立ちやうさ。

源吾 用心もへちまもいらぬ。なんでもかへる。をれがあしでをれがかへるに、だがなんといふものだ。そこをはなしをらう。一トよひからのむしやくしやばら、とむるほど、こゑがたかくなる。

感情的になった源吾の声が大きいので、遊女はまず静かにさせて、帰りたいという希望を聞き入れながら、新造にも加勢してもらって、無理やり源吾を座敷に連れ戻す。

女郎 マアしづかにしてくんなんし。外のきやく衆がやかましようござんす。用があんなんすなら、尋常にけへし申すから、マアちよつと座敷へお出なんし。

新造 ア、おいひなんすから、マアお出なんしヨ。一トむりむたいにひきずつてゆき、床の中へすはらせ、

源吾が感情的になっていることを源吾自身に悟らせようとして、新造（名は、よふね）を出しにを使って、顔がこわいことを気づかせながら、源吾の羽織を脱がせて、新造にしまわせて帰れないようにする。

女郎 ちよつと見な、こはひ兒だヨ。一トにつこりとわらひ、はをりをぬがせて、ほうり出し、

女郎 よふねさん、しまつておきな。

源吾 イヤへ、しまつてはならぬへ。どうでもかへらにやならぬ。一ト立。

女郎 一ひきすへ、

ここから遊女のストラテジーが発揮される。源吾を客としてではなく、本心から愛していることを確認させつつ、源吾の持ち物一つずつ取り上げて、ますます帰れないようにする。

女郎 マア聞なんし。此ぢうもわつちやなんといひしたへ。おまへは客しゆ

とは思ひせん、つとめをはなれてあひんすと、いひしたじやないかへ。

一トいひながら、ふところのきせるたばこ入を、取あげる。

源吾はそれでも必死に帰ろうとする。遊女は源吾が立腹した理由を言わないのは他人行儀だと言う。

源吾 何もきかんへ。かへるへ。そんな手でいくのじやない。

女郎 はらのたつ事があるなら、一ト通りわけをいつてきかせて、なぜくんなんせんへ。いつそ他人がましいヨ。一ト云ながら、又紙入を取あげる。

遊女は後で源吾とゆっくり話をしたいと思っていたと真意を述べる。遊女に迫られ、衣服を脱がされ、持ち物を取られて、源吾は遊女のいいなりにされてしまう。

源吾 イヤへ、かへしてくれ。いやじやへ。

女郎 名代の客しゆを早くかへして、ぬしとゆつくりとはなしもあるに思つて居た、わたしが心いきも知んなんせんや。一ト又客の帯をとく。

源吾 イヤサ、かへらにやならんへ。

女郎 その心いきを無にしなんす。なぜ男はそんなに気づよひものだノウ。一ト又うはぎをぬがせる。

源吾 イヤへ、どふあつても帰るへ。一トくちではいへど、もはやじゆうになる。

ついに源吾は遊女から肉体で迫られる。

女郎 エ、きつい人じらしだヨウ。一トしつかりとだきつき、そのまゝよこにをしこかす。

源吾 コレいやらしい事よしてくれ。かへらにやわるひ。

女郎 それほどかへりたいかへ。にくひノウ。一トだきついた手で、かたをつめり、口に口。

源吾 ヲ、いてへ。べらぼうめ。サアそんなら、ゐればどふする。一トのろくなる。

最後は新造の視点になる。

新造 —やうへしづまつたと思ひ、びやうぶをひきまはし、

新造 ヲヤばかりしひ。今のさはぎで、ゆびの輪をおとしたそふだ。

客の怒りもおさまり、静かになったので、寢床の周りに屏風を引き回す。「ばからしい」というのも、ことの結果を見通していたからであろう。

以下、ストラテジーの分析を行う。待ちぼうけをくわされた源吾は最初「帰る」と息巻いていたが、最後には遊女にリードされてしまう。源吾は現代の言い方をすれば、「モンスター客」である。しかも、それが常態化しているようである。モンスター客を鎮めるためにとった遊女のストラテジーとは何か。

会話のストラテジーに分類されるもの

- (1) 客を思いやる態度をとって、深夜に帰るのは用心が悪いという。

「それだつても、用心がわるふござんす」

- (2) 客の主張を全面的に否定することはしない。

「用があんなすなら、尋常にけへし申すから」

- (3) 客が感情的になっていることを自覚させて、冷静にさせる。

「きつい腹立ちやうさ」

「ちよつと見な、こはひ兒だヨ」

「なぜ男はそんなに気づよひものだノウ」

- (4) 客の言動が非常識であることを客に自覚させる。

「ぬしはマアなんだへ、今じぶん」

「外のきやく衆がやかましようござんす」

「きつい人じらしだヨウ」

- (5) 客のことを心を許した愛人として特別待遇する。

「おまへは客しゆとは思ひせん、つとめをはなれてあひんすと」

「いつそ他人がましいヨ」

- (6) 遊女の心情を悟らせる。

「ぬしとゆつくりとはなしもあるにと思つて居た、わたしがいきも知んなんせんでや」

「そのいきを無にしなんす」

「それほどかへりたいかへ。にくひノウ」

行為のストラテジーに分類されるもの

- 新造とともに客をむりやり座敷に連れ戻す。
- 少しずつ客の服や持ち物を取り上げて、帰れないようにする。
- 客に身体的な接触を行う。

源吾のようなモンスター客を強引におとなしくさせる遊女の手腕はみごとである。

ところで、「見ぬかれた手」という題名の由来は何であろうか。深夜にもかかわらず帰ろうと言いだしたのは、客の打った芝居とも考えられるが、芝居にしては怒り方が尋常ではない。また、客は直情径行の人物で、芝居を打てるほど深謀遠慮があるとは思えない。「見ぬかれた」というのは、遊女からの観点で、客が短気ですぐに怒り出すのはいつものことであり、遊女がとりなせば短気がすぐに収まることを見透かされていたということであろう。このように扱いやすい客であるからして、遊女は後回しにしたのであろう。遊女がこの客に対してたかをくくっていることは京伝の「評」にも触れられている。

6. 「しんの手」における FTA 軽減のストラテジー

最後に「しんの手」について考察する。

客：三十三四歳。いやみのない色男。

遊女：二十二三歳。昼三。少し気分が悪い様子。

この客は、惚れた遊女に入れ込んでしまい、茶屋に30両もの借金が出来て窮地に陥っている。親からは勘当寸前の状態。遊女を身請けして結婚したいところだが不可能。他の遊女に殺し文句をいっても相手にはされないし、他の店にも断られる。こんなに落ちぶれたのは自分のせいと落ち込んでいる。遊女は客へ一筋の恋を貫き、かみさん気取りで、客との結婚を望んでいる。しかし、この客の借金のため茶屋から邪険にされ、やり手衆の説教をうけ、中の間（事務所）にも後ろ指をさされている。しかも、その客を自分の座敷に居続けさせているので、当

然周囲には迷惑がられている。他の遊女屋への鞍替えを希望しているが、まだ年季が残っているので出られない。心配した母が尋ねて来ても、忠告を聞かず、すでに絶縁するつもりでいる。しかし、心根が優しいので、客が落ちぶれたのは自分の責任と述べたり、客へ一部援助を申し出たり、病気になった客の母に配慮をしたりもする。双方ともに相手を思い合い、深い愛情で結ばれているが、周囲から孤立し、追い詰められた状態になっている。遊女は自殺をほのめかすが、それでも互いに強い愛情で結ばれようとする。「しんの手」は、自分を零落させながらも真実の愛情を貫くことによって、遊女からも真実の愛情を得ることができるというもので、究極の愛情関係ということができる。しかし、すでに遊廓においては許容されにくい関係にもなっている。

「しんの手」には相互に思いやる男女の愛情あふれる会話が展開されている。「やすい手」や「見ぬかれた手」には対立的なコミュニケーションが多く、FTA増大のストラテジーが多かったが、ここではFTA軽減のストラテジーが主体になっている。

その内容を整理する。

客のストラテジー

○強い責任意識を述べること

悪い事態の発生を自分の責任にして、遊女に負担をかけまいとすることになる。自分は不幸者だ、母の病気も自分のせいと言うことも、自分に責任があることを述べている。

○遊女の援助を断ること

遊女の援助申し出に感謝しつつも、先に自分でも努力することを言って、遊女に負担をかけまいとする。

遊女のストラテジー

○強い責任意識を述べること

客と同様に窮状の原因は自分にあると言って、客の精神的な負担を和らげようとする。

○他者への攻撃をすること

他者を攻撃することは客との共同戦線を張って、客の精神的な負担をいくらかでも軽くしようとするものである。たとえば、共通の敵となる茶屋を非難したり、やり手衆の忠告を無視したり、店替えや母との絶交をも覚悟したりする。

○愛情を確認すること

あなたと自分は悪縁だと述べて、客との一体感を確認し、客の心理を安らげるものである。自分は客の女房のつもりだと言い、客の母の病気を気にかける。

○金銭的な援助の申し出

悪い夜具を売ったり、羽織を作らせたりして、客の金銭的負担を少しでも軽くしようとするものである。

○生への希望を述べること

思い過ぎすと死にたくなるが自殺はしないと明言することで、落ち込んだ客を励ます効果がある。

いずれのストラテジーも互いに相手を思いやり、気遣うものであり、窮状に陥った中で真の愛情を確かめ合うものである。コミュニケーションの協調が最大限に表れたものということができる。しかし、これだけではうわべだけのコミュニケーションのように思える。事実、客も遊女もまだ遠慮がちである。ここから真の愛情に展開させるきっかけとなるのがコミュニケーションの中断である。客が会話の途中で寝ようとするが、遊女は客を寝かそうとしない。

女 いやだよ。ねかしやアしねへよ。ばんにねなんしな。サア目をあきなんしへ。一トはなをつまむ。

「いやだよ」「～しねえよ」などと、遊女の言い方が少し乱暴になってくる。強引に寝かさないようにして、鼻をつまむことまでする。それでも客が寝ようすると、今度は遊女がすねて後を向く。

客 コレサ、おがむからちつとねかして。

女 そんなら勝手にしなんし。一トすねて、うしろむく。

遊女はまったく感情的になっている。遊女の気をそこねたと思った客は今度は

寝ないと言い出す。

客 こう、あやまつた。そんならねねへ。ねねへといひ出しちやア又ねねへ。

客は今までやさしい言い方をしていたが、男らしい毅然とした言い方になる。とうとう芝居がかった会話に展開して、一気に和合へと進む。

客 コレなぜこねへに迷はせた。うらみだぜ。一トひきよせる。

女 一わらひながら、

女 なぜほれさせてくんなんしたへ。一ト客の枕の下から、手をさしこみ、男のくちびるへくひつき、

女 わつちや跡月から、月の物をみんせんから、いつそ苦労だよ。一トせなかへ手おかけ、

女 ヲヤあつかましい。おときなんし。一ト男の帯をといて、夜着のそとへくり出し、じぶんも帯をとき、はだとへ合せてしつかり。

客からのコミュニケーション中断（寝ようとする）と、遊女からのコミュニケーション中断（すねて後を向く）と、二つの中断によって一気に和合に進む。和合にいたるきっかけとしてのコミュニケーションの中断は、他の三つの「手」にもある。この意義については次節で検討する。

7. 遊廓における会話の特徴

『傾城買四十八手』の四つの「手」についてコミュニケーションの観点から考え直してみよう。四つの「手」すべてに共通して見られることは「沈黙」である。会話の流れの中であえて沈黙することによって会話が中断されることから、相手に精神的な動揺を引き起こす。これは会話のストラテジーの一つと考えてよい。（なお、沈黙とは何らかの動作の結果起きることが多いので、以下の分類にも動作を示すものがある。）

客の側が行う場合

消極的な沈黙

うぶで経験がないことによる無口の状態：しっぽりとした手

眠くなって寝ることによる沈黙:真の手

積極的な沈黙

夜中に帰宅しようとする:見ぬかれた手

遊女の側が行う場合

積極的な沈黙

客の悪口から逃れるために寝る:やすい手

すねて後ろを向く:真の手

コミュニケーションを続けることは、愛情の関係を維持することと等しい。沈黙によってそれが中断されることは愛情の中断でもある。沈黙した側にとっては愛情を打ち切ることになり、これに対して沈黙された側は愛情を失うことを恐れて精神的な動揺が起きる。そのためにそれを取り返そうとして、かえって愛情が深まるものと考えられる。

沈黙に関連したストラテジーがある。「しっぽりとした手」に存在する、相手からの質問にまともに答えない「はぐらかし」のストラテジー、相手のいうことを信用しない「うそ」追及のストラテジーの二つである。この二つは相手をじらすことになるので、「じらし」のストラテジーと一括する。この「じらし」もスムーズな会話が展開しない点において沈黙と共通するものがある。会話が展開しないことは愛情が阻害されることにもつながるので、やはり「じらされた」側が動揺するのである。「しっぽりとした手」のムスコはうぶではあるが、始めから「じらし」に精通している。遊女もかけ出しではあるが、ムスコの「じらし」に対応しつつ、自分の思いを貫いている。沈黙や「じらし」のストラテジーは、会話における協調を前提とするグライスの公準に適合しないものである。要するに、これらは会話の展開を阻害するストラテジーとして共通する。これはFTA増大のストラテジーでもある。しかし、このような会話のストラテジーによって客も遊女も本心が露わになってくる。そして最後には本心からの愛情を語るができるようになる。これが究極の協調型コミュニケーションに展開すると理解することができる。このような沈黙や「じらし」というストラテジーは、遊廓という特殊な環境において可能であったものと考えられる。

遊廓とは「遊び」の世界である。実際のな会話においては完全なコミュニケーションを行い、すみやかな情報伝達が必要となるであろう。しかし、遊廓における男女のコミュニケーションは「遊び」を旨とするものであるから、情報伝達を主眼とする通常のコミュニケーションである必要はない。むしろ、沈黙や「じらし」などのストラテジーによって、スムーズな会話が阻害されている。これはやや特殊なコミュニケーションのあり方であって、遊廓における男女のコミュニケーションの特徴とみなすべきものである。ここではスムーズな会話よりもいかに遊女を口説くか、口説かれるかということに主目的がある。たとえコミュニケーションに支障があっても、愛情の獲得ができればそれでよいのである。むしろ愛情が獲得できなければ、遊廓における男女のコミュニケーションとしては無意味である。そのためにはあえて沈黙や「じらし」のようなストラテジーを用いるのであり、これが遊廓におけるコミュニケーションを特徴づけるものということができる。

追記：本研究は平成 24 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)「江戸語・東京語におけるコミュニケーション類型の研究」の助成を得て行った研究の一部である。

